

使

うかもしれない、とか、取りあえずとっておく、という発想厳禁を自分に課した。必ず使う以外は捨てる、を貫いた。新しい古い、高価廉価の別はまったく無視した。ネットで競売にかける手立てがあることも知ってはいるが、それにかける手間が惜しい。ここは非情に徹して、売れるかも、と思う物は捨てるに分類した。ちよつとでも迷いが生じたときは、「自分はよいとしても、子や孫たちはどう思うだろうか」と問うた。何も知らない子どもたちが、これはなぜ取ってあったのだろうか、と疑問を感じるかもしれないと想像できたときは、捨て組だ。

これまで安閑とのさばっていた物たちは、主人が代わった途端に肅清の嵐に巻き込まれたのである。大量処分を断行するのは二度目、前回は母の亡くなった後だったのだが、そのときは単に不用品を捨てるとしか考えていなかったため、今思えばはなはだ不徹底だった。今回、いかなる物が残っているかをすべて把握できるまで絞り込めたのは、グラフィックデザイナーの原研哉氏の文章に出会ったことが大きい。たまたま『日本のデザイン』（岩波新書）を読んでいたら、「家」をテーマにしたエッセイがあった。「現在の住まいにあるものを最小限に絞って、不要な物を処分できれば、住空間は確実に快適になる。試し

に夥しい物品のほとんどを取り除いてみればいい。おそらくは、予想外に美しい空間が出現するはずだ。」
「ものを最小限に始末した方が快適なのである。何もない簡潔さこそ、高い精神性や豊かなイメージネーションを育む温床であると日本人はその歴史を通して達観したはずである。」

読書の喜びを感じるのはいくつ時だ。自分の目的がまずあって、それがために選んだ本から知識なり技術なりを得るのもうれしいが、それは意外性がない分だけ喜びは減じる。偶然に読んだ一節に、これは今の自分に向かって語られていると驚くとき、その本との出会いの妙も含めて最上の喜びが得られる。図書館の展示コーナーでふと気になって手にし、日本人の美意識を応仁の乱から説く書き出しに興味を湧いて借りて帰ったのだった。
ぼくにとつて物を捨てるのが、不用品の処分から、空間や簡潔さの創造に変わった。妻に、取り憑かれていると呆れられ、処分場のおじさんたちに「毎日来る」と笑われても、ちつとも苦にならなかつたのは、皮肉なことだけれども、捨てることが作ることになったからである。
何もなくなつた玄関に、妻が裏庭から摘んだ真つ赤なバラを一輪挿しに生けて置いていた。



專業ババ奮闘記(その2) 54

木幡智恵美

虫捕り (1)

玉湯と我が家、連日三人の孫たちと過ごし、宗矢は少しずつではあるが、私に慣れてきた。これ幸いにと、娘は顔を合わせるなり宗矢を私に預けるようになった。
そんなある日、義母をデイサービスに送ってから玉湯に寄り、娘の車で私たち夫婦と娘たち母子四人で出雲の畑に向かった。「まだあ?」「まだ着かんの?」を連発する寛大と実歩の気持ちを逸らしながら一時間後ようやく私の実家に到着。荷物を降ろし、まずはサヤエンドウ採りにカボス畑へ。寛大と実歩はそれぞれにはさみを持って一つひとつ摘んでいった。

次はゴンダ畑。ここは主に水やりだ。大根は半分以上枯れてしまっている。ホウレンソウもレタスもぽつりぽつり。たつぷりと水はやったものの、どれだけ生き残るだろう。収穫したのはアスパラガス二本、ブロッコリーの枝だけ。
寛大はといえば、虫捕り網を手に、モンシロチョウを追いかけている。網を振り回している姿を見ると、長男が小さい頃を思い出す。実歩はテントウムシを見つけて喜んでる。ブロッコリーの黄色い花の周りをミツバチが飛び回っているの、寛大と実歩には離れるように言う。

暖かな日差しが心地よく、空気の爽やかな日だったので、弁当は玉湯への帰り道、どこかの公園で食べようということになった。時間的には宍道あたりが適当だと、総合運動公園に入ろうとしたところ、入り口に鎖縄がかけられている。玉湯の家のすぐ近くではあるが、玉造史跡公園にしようと、駐車場に入ろうとしたら、そこも閉館の札が出ている。コロナの影響で、あちこち閉鎖されているようだ。駐車場に停めてある車があったので、その横に車をつけ、道路を挟んだ下の公園にシートを広げ、弁当を食べた。食事の後、寛大は蝶探し。「ほら、モンキチョウ」「あ、アゲハだ」と、寛大と一緒に私も蝶を探していた。

玉湯の家に帰り、子どもたちを昼寝させる。絵本はやはり寛大が自分で読みたがり、覚えたところは早口で、そうでないところは一字一字辿りながら読む。実歩はすぐに高いびき。寛大は蝶のことが頭から離れないのか、なかなか眠れないようだった。

30代フリーター やあ、ジイさん。報道各社の世論調査で菅内閣の支持率が軒並み不支持率を下回っている。時事通信の調査（5月7〜10日実施）によると、不支持の理由（複数回答）は「期待が持てない」（25・1%）が1位で、「リーダーシップが無い」（24・1%）がそれにほぼ並んでいる。

年金生活者 政府は5月14日、新型コロナ対策として岡山、広島両県にまん延防止等重点措置を適用する案を分科会からダメ出しされ、より厳しい緊急事態宣言を両県と北海道に出す案を再諮問して認められた。経済界に押されてゆる目の案を出したものの、医療界に押し返され、主体性の欠如をさらけ出した。

医療界は「医療崩壊」を防ぐためとして、国民に行動の自粛を求め続ける一方、崩壊しない医療体制をつくる努力はしないできた。他方、経済界は「経済崩壊」を止めようと、個人の行動や事業者の営業の制限をできるだけ

緩くするように求めてきた。

両者のはざまであつちに引つ張られ、こつちに引つ張られる政府はわざとそうしているのではないかと思えるほどだ。受け身の姿勢を続けていれば、落ち着くところへ落ち着くだろう、「リーダーシップが無い」の一番だ、と。

30代 支持率が危険水域と言われる30%を切った調査結果はまだない。年金 コロナ対策に不満があるからといって、完全に見離してしまうと事態はもつと悪くなりかねないという国民の懸念が、30%を割るところまで支持率の落ちない理由と考えられる。

菅義偉は、自分が社会や国家について理念もビジョンも持ち合わせない実務型の政治家であることを承知しているはずだ。平時なら既存のルールにしたがつて実務を片づけていればやっていける。非常時はそのルールを変えることが必要になる。新しいルールをつくるには社会と国家の全体が見えていなければならない。理念もビジョンも

なければそれが見えない。

だったら、自分で判断するよりも、医療界と経済界の綱引きのゆくえに従ったほうが大過ない結果が得られるのではないか。菅がそう考えたとしても不思議ではない。

30代 政府は当初、感染拡大の抑制と経済の両立を強調していた。

年金 人類は両者を両立させる技術はまだ手にしていない。ウイルスをゼロに近づけたがる医療界と、市場を停滞させたくない経済界との綱引きが始まる。

この綱引きは権力闘争であり、その当事者の一方を「医療権力」、もう一方を「市場権力」と私は呼んできた。これまで前者が優位に立つ展開が続いている。政府に休業や時短営業を求められている外食やイベント、国民の外出自粛のありを受けける旅行などの業界の苦境がそれを示している。

「医療権力」が優位に立っているのは、医療が必需的消費の対象だからだ。外食や旅行、イベントは選択的消

費の対象であり、「市場権力」はその分野に関する限り譲歩を余儀なくされる。言い換えれば国民の多数はことコロナに関する限り「市場権力」よりも「医療権力」を支持している。世論に神経をとがらせる政権が、前者に引つ張られがちなのは当然と言える。

ただ、医療は経済統計上は必需的消費の対象とされているが、実態は選択的消費の対象となっている部分を含んでいることもコロナはあらわにした。医療機関での感染を恐れた国民が受診を控えるようになったのは、不要不急の過剰な医療が存在することをうかがわせる。それが「医療権力」の強さの源泉のひとつにもなっている。

30代 菅政権はコロナ対策以外でも腰の据わらなさを露呈した。野党の反対で国会での入管法改正を断念した。

年金 今年1〜3月期のGDPは年率換算で5・1%減少した。戦後最悪となった去年のGDPの落ち込みに続く景気の低迷に、菅政権の面々はバブル崩壊期の細川連立政権の成立や、リー

ニュース日記 786
中村 礼治

わざとフラついているのか

マンショック後の民主党政権成立の「悪夢」の記憶をよみがえらせたのではないか。
30代 国民が今の野党に政権をまかせるとは思えない。
年金 バブル崩壊による景気後退が鮮明になった1993年、細川連立政権が成立し、自民党が初めて下野した。そのときの総選挙では「政治改革」が

最大の争点となった。高度経済成長をあと押してきた自民党政権の経済優先政策の優位性に大きな疑問が突きつけられた。
2009年の総選挙で政権を奪取した民主党が掲げたマニフェストの柱は「官僚主導から政治主導へ」だった。インフラをつくり、企業の設備投資を促して経済成長をあと押してきた霞が関の官僚と、その振り付けに従ってきた自民党の路線がリーマンショックによって大きくつまづいた。

1993年が不動産バブルの崩壊、2009年が金融バブルの崩壊だったのに対し、コロナは飲食、イベント、旅行を中心に実体経済を直撃した。一般の国民にはバブルの崩壊よりも打撃の実感が大きいはずだ。憲政史上最長を誇った安倍政権でさえコロナに追い詰められて退場した。いま野党への政権交代はないにしても、与党内での疑似政権交代はあり得ることとして、菅義偉は自らの退陣も想定しながら政権運営を続けていると推察される。